

平成 27 年度第 6 回小学校ゼミナール記録（新田班）

参加者：新田（授業者）、小山（広島大学教授）、原、山田、石橋

1. 協議事項

広島大学附属小学校研究大会に向けての授業検討
小学校算数科第5学年「資料の整理」における授業づくり

2. 協議内容

協議は、授業者が事前に作成した学習指導案に対して行われた。対象となった単元は小学校第 5 学年「資料の整理」である。本授業は「PPDAC サイクル」における D（Data）に位置付くものであり、目標は、統計的に考える力を育成するために一連の統計的な活動を仕組み、これまで学んできた統計的な知識や技能の具体的場面での活用の仕方を学ぶことであった。具体的には、本授業は教材としてサイコロを用いて、各目の出方を試行回数別に分析し、その結果を表やグラフという道具による視覚化とそれら表現の比較することで大数の法則の考えを表出することを目指すものである。

しかし、本授業は確率の学習であり統計の学習となり得てないのではないかという意見が出され、扱う内容について再考する必要性が生じた。教材については、まず、給食の残食やソーラー発電の資料など、容易に収集可能な、学校にある身近な資料を扱うことが挙げられものの、児童が興味を持つ題材であるかという懸念があったため、「言語・数理運用科」で扱った事例がよいのではないかという意見がなされた。「言語・数理運用科」とは、広島市教育委員会が独自に導入した科目であり、新聞記事、チラシ、運賃表、映像など、日常生活の中にある資料をもとに学習する科目である。本科目は、広島市の資料であるため生徒も親しみやすく、また授業者も授業を実践した経験があり、小山（広島大学教授）もその開発を行っていたため、その内容を熟知しており、統計教育を行う際に参考になりそうだという結論が出た。

3. 今後の課題

今回は、小学校での統計教育に相応しい教材に関して協議した。結論として、本検討会において示された授業では統計の学習というよりもむしろ確率の学習をさせてしまうことが懸念されるため、指導内容についての再考をする必要があるということ、そして統計の学習をするために「言語・数理運用科」で扱われている資料を今後参照するのはどうかという示唆がなされた。しかしその資料は古いため、新しい資料の収集は授業者が行っていかなければならないかもしれない。

また、本協議では授業に関する議論が行えなかった。教材の決定後、小学校で PPDAC サイクルを用いてどのように児童に統計を学習させるのかも、今後の課題である。

（文責：石橋 一昂，山田 大希）